

【論文】

スーパーグローバルハイスクール指定校卒業生の興味関心および意識の変容に関する質的研究

京都大学 服部 憲児

序

近年の我が国においては、国家の財政難を背景に NPM の考え方が採用され、教育政策においても成果主義が取り入れられ、事前・事後評価、それに基づく重点配分もなされるようになってきている。そこでは数値目標とその達成状況が重視され、政策立案の段階から成果目標を立て、一定の指標によって評価する方向に進んでいる。しかし、教育関係事業の成果は数値化できるものだけにとどまらない。数値では表すことが困難な成果も適切に考慮しなければ、教育政策の正当な評価は困難であり、歪んだ評価になる危険性が大きいと言わざるを得ない。

このような問題意識から、スーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）指定校の教員に対するインタビュー調査の分析により、教員がどのように SGH 事業に対応したか、教育に対する意識の変化や資質・能力の向上の認識などを明らかにした服部の研究は、先行研究においては定量的な手法により SGH 事業の成果が分析されているものの、そのプロセスや因果関係などは必ずしも明らかになっていないことを指摘している¹。本研究では、上述の政策評価上の問題点や、このような先行研究の状況に鑑み、SGH 事業に焦点を当て、質的分析方法を用いて数値では捉えることが難しい教育の成果を、そのプロセスも考慮しながら、多角的・複眼的に明らかにすることを目的とする。具体的には、SGH 指定校の卒業生である大学生（以下、卒業生）を対象とし、SGH の教育プログラムを卒業生がどのように受け止めたのか、何を感じ、何を学んだのか、その結果としてどのような影響を受けたと認識しているのか等について、高校生（以下、生徒）に対する調査の分析結果²もふまえながら考察を行う。SGH 事業自体は 2020 年度をもって終了となり、「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」および「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」へと受け継がれていくことになる³。しかしながら、卒業生の語りの分析から事業の成果の把握を試みることは、そのすべてを明らかにできるものではないが、量的分析だけでは捉えきれない部分が存在することを示すことができ、政策の成果の多角的・複眼的検討に有意に作用し、今後の教育改革に対しても重要な示唆が得られると考える。

1. 研究の方法と対象

(1) 分析方法

上記の問題意識・研究目的より、本稿では、生徒が SGH の教育プログラムをどう受け止めたのか、その意識や行動にどのような変化を認識しているのかについて検討する。そのために、「SGH の教育プログラムの卒業生の受け止めとその結果」を分析テーマとする。具体的には、(1)SGH の新しい教育プログラムを卒業生がどのように受け止めたのか、(2)それをどのように感じ、何を学んだのか、(3)SGH

の教育プログラムを経験した結果、どのような影響を受けたと認識しているのかを明らかにする。

分析の手法としては、木下康仁の M-GTA による質的分析を援用する⁴。M-GTA の説明やその教育領域での有効性については、既に先行研究で言及されているので⁵、重複を避けるためここでは省略し、本研究が M-GTA を研究方法として参照することが適切である理由を以下に提示する。第1に、研究対象である SGH 事業の教育プログラムは、当然ながら生徒同士、教員同士、生徒と教員との関わりの中で実施されるものであり、それらの相互作用の中での元生徒としての卒業生の変化を捉えようとするものである。したがって社会的相互作用にかかわる研究であると位置づけることができる。第2に、本研究では、SGH への指定により様々な教育プログラムが実施されることになり、それらを通して卒業生が生徒時代に様々な経験をし、そこから学び、思考し、成長していくプロセスに着目するものであり、プロセス的性格を有しているといえる。第3に、これらの分析を通して、新しい教育プログラムに接しての生徒時代も含む卒業生の思考や行動の変容プロセスを明らかにし、その理論化を試みるとともに、それが教育実践や学校経営へとフィードバックされ、教育現場で活用されることを最終的な目的としている。本稿は、そのために、教育および教育経営改善の理論生成と実践支援に向けた基礎的な知見を得るための基礎的作業を行うものである。

(2) 分析に用いるデータ

本稿は「SGH の成果に関する質的研究」の一部をなすものであり、そのために 2018 年から 2019 年にかけて実施した SGH 指定校 2 校（公立 1 校、私立 1 校）の生徒、卒業生、教員（いずれも当時）に対するインタビュー調査のデータに基づくものである。この調査の概略は下掲の通りである⁶。このうち本稿の分析に主として用いるのは、A 校卒業生に対して行った半構造化インタビューの録音データである。なお、学校が特定されることを避けるため、どちらが公立校か私立校かはここでは言及しない。

A校 調査日：2018年12月8・11・14日、2019年1月11・25・29日、2月13日、3月6日

場所：A校 調査対象者：同校教員 26名、生徒（当時）22名、**卒業生 12名**

B校 調査日：2019年2月7・8・20・21日

場所：B校 調査対象者：同校教員 14名および生徒 17名

卒業生に対する主な質問項目は以下の通りである。

- ・SGH の何が面白かった（場合によっては面白くなかった）か。SGH プログラムから何か学んだことはあるか。受けた影響はあるか。それはどのようなものか。
- ・高校時代に身についたと思うことはあるか。
- ・どのような勉強の仕方をしていたか。何か工夫をしていたか。SGH 関係の学習と受験勉強との両立はどのようにしていたか。
- ・関心のあることは何か。大学の勉強以外に何かしているか。それはいつ頃からか。
- ・将来はどのようにになりたいか（進学、職業など）。

分析は木下康仁による M-GTA の手順に倣い⁷、上記インタビュー調査において聞き取った録音データの文字おこしを行い、データ内にある記述を参照し、オープン・コーディングにより概念（発話内容の趣旨・要点）を生成し、概念ごとにワークシートに記入した。ワークシートは 32 枚作成されたが、概念の不成立、統合、修正の結果、最終的に成立した概念数は 16 となった。

次いで概念の対極例・矛盾例の有無をチェックし、恣意的・操作的解釈の回避を行った。全ての概念について対極例、矛盾例が無いこと、新たな概念の生成の可能性が無くなったことを確認した。そして概念間の関係性を検討し、関連性の強い概念を包括的に表現するサブカテゴリー、さらに関係するサブカテゴリーおよび概念を包括的に表現するカテゴリーを作成した。その結果、サブカテゴリー数 2、カテゴリー数 4 となった。最後に概念、サブカテゴリー、カテゴリーの関係性を示す概念図を作成し、ストーリーラインをまとめた⁸。

2. 生徒調査の分析結果

(1) 抽出された概念とその定義

A校卒業生の発話からは以下の 16 概念が抽出された。概念名とその定義は以下の表 1 の通りである。欠番があるのは分析の過程で成立しなかったものがあるためである。

	概念名	概念の定義
概念 1	活動の楽しさ	人との関わり合いや交流が楽しかった。
概念 2	大学への繋がり	高校時代の勉強や経験が、大学での学業等に繋がっている。
概念 5	学び方を学ぶ	自分で調べたり学んだりする方法を学んだ。
概念 6	伝え方を考える	どう伝えるかを意識してプレゼンを考える。
概念 9	主体性の獲得	高校時代に、または高校時代の経験から主体性が身についた。
概念10	高校生には難しい	今（大学生）なら分かるが、高校生には難しく、あまり理解できなかった。
概念11	未来への影響	高校時代の活動がその後に影響した。
概念12	他者との関わりから学ぶ	他者と関わることによって学ぶことがあった。
概念14	自校の良さ	他の学校ではできないこと、自校の良さを感じる。
概念16	知らなかったことを学ぶ	活動を通して、今まで知らなかった新しいことを知った。
概念17	技術の習得	学習を通して様々な技術が身についた。
概念18	自信がついた	経験することによって自信がついた。
概念19	先生との関わり	先生とのかかわり（指導、サポート、共同作業など）の中で活動できたことが良かった。
概念25	機会の重要性	様々な機会があることが重要である。
概念28	学年を超えた交流	学年を超えた交流の機会があり、そこから学んだ。
概念29	現地に行くことで学ぶ	現地で体験・交流する中で学ぶことがあった。

各概念は複数のインタビュー対象者の発話から生成されているが、紙面の関係上すべての概念について具体例を紹介することができない。そのため、以下に概念 1 <活動の楽しさ>を例として、その内容と概念の生成のもととなった具体例の一部を示しておく⁹。

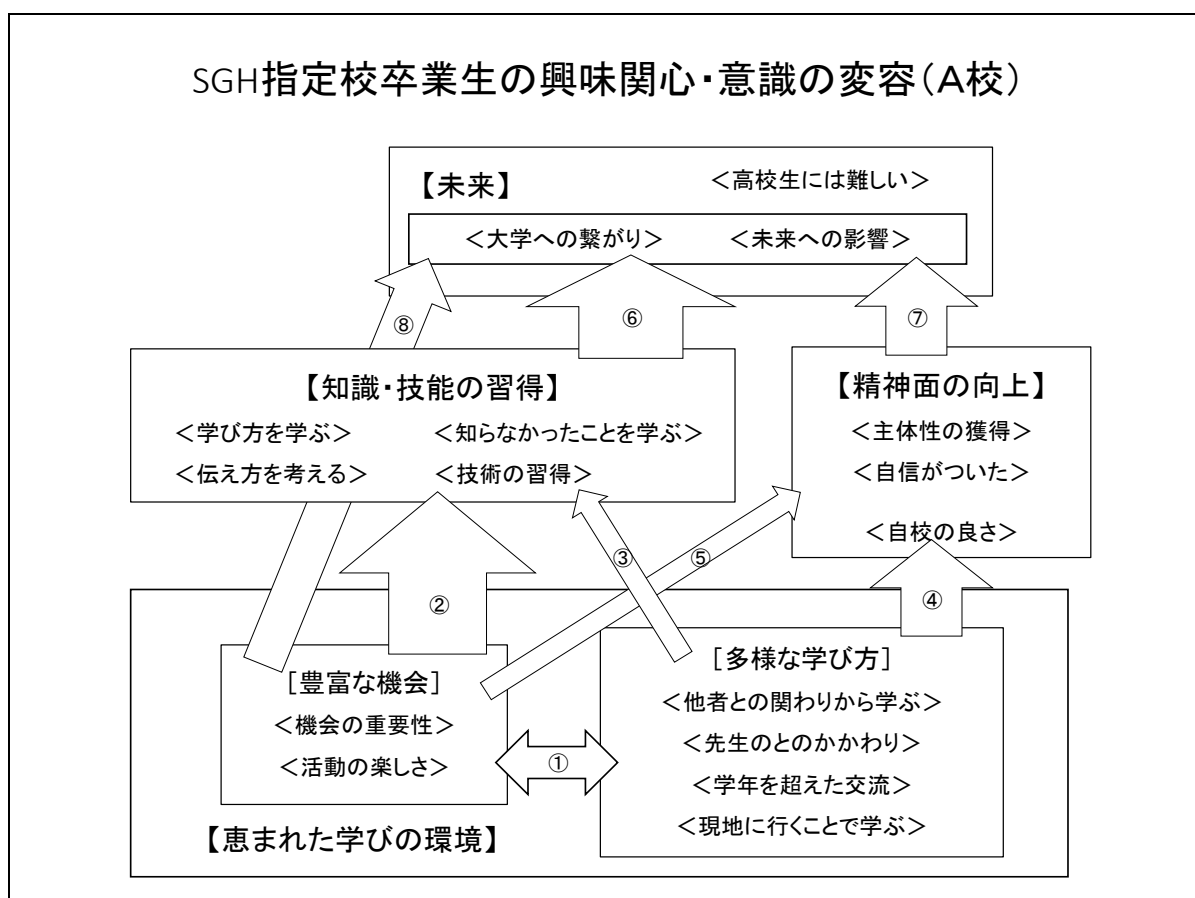
<機会活動の楽しさ>とは、「人とのかかわりや交流が楽しかった」とするものである。具体例は以下の通りである。末尾の（ ）内は整理用の卒業生番号である（以下の記述においても同様）。

- ・楽しかったっていうのが第 1 にあるんですけど、まあそれがどう楽しかったかっていうと、そのまあ関わり、植林をすることもそうですけど、関わり合いが楽しかった。(AG1)

・少人数なんでみんなで一緒になって調べるっていうのが高校生の時は楽しかったです。(AG10)

(2) カテゴリーおよびサブカテゴリー

卒業生調査の分析の結果生成されたカテゴリー、サブカテゴリー、概念およびそれらの関係性を図示した概念図は下掲の通りである。概念および関係性は、複数の調査対象者に共通したもののみを抽出した。図中でカテゴリー名は【 】, サブカテゴリー名は [], 概念名は< >で表現されている(以下の記述においても同様に表記する)。図中の矢印はカテゴリーやサブカテゴリーの間の関係性を表している(詳細は後述)。



生成された4カテゴリーは、【恵まれた学びの環境】、【知識・技能の習得】、【精神面の向上】、【未来】である。本来であれば、各カテゴリーの内容について記述の具体例(ヴァリエーション)を用いながら説明するところであるが、紙面の関係から、下掲の各カテゴリーの記述においてまずは「内容」を説明し、次いで代表的な具体例を示しながら語りにみられる「特徴」を示すこととする。表1にある概念の定義も適宜参照いただきたい。

1) 【恵まれた学びの環境】

内容：卒業生は、高校時代に【恵まれた学びの環境】が有ったことを高く評価している。A校には学び

の「豊富な機会」があり、その「機会の重要性」や「活動の楽しさ」を実感している。そこには「他者との関わりから学ぶ」こと、「現地で行くことで学ぶ」こと、「先生との関わり」からの学び、「学年を超えた交流」からの学びなど、「多様な学び方」が存在しており、卒業生はそのことを肯定的に捉えている。

特徴：卒業生は、外国での活動機会や人との交流の機会など、SGHの教育プログラム下での学びの機会や活動を高く評価しており、充実した教育条件・学習環境にあると考えている。代表的な具体例は以下の通りである。

- ・高校生もいろんな学校、他の系列の学校からも来てるので、そういう人たちの、おんなじ高校生の立場でも考えてることが違ったりとか、そういうのを知れるのがすごいいい機会だったなと思います。(AG2)
- ・学校で勉強することとは別に、実際この(…中略…)周りの環境っていうのを目にして、その、現地で教えてもらうっていう、すごく貴重な経験だったんで、すごく良い経験になりました。(AG8)

2)【知識・技能の習得】

内容：卒業生は、高校時代に上記のような環境下で「学び方を学ぶ」ことができた、「知らなかったことを学ぶ」ことができた、「伝え方を考える」ことができた、「技術の習得」ができたと実感しており、その後の学習に有効な【知識・技能の習得】ができたと認識している。

特徴：卒業生は、高校時代のSGHの教育プログラムの学びから、文章の書き方やプレゼンテーション能力といった学習技術や汎用的能力が身についたと考えている。代表的な具体例は以下の通りである。なお、具体例中にある「●●」は学校名である(註も含めて以下の記述において同様)。

- ・たとえば学術研究だったら文献に書いてあることをそのままその通りっていうふうに飲み込むんじゃないで、それに対して「いやそれは違うでしょ」っていうふうに反論する力っていうのが●●ではついたんじゃないかなっていうふうに考えていて、やっぱりゼミの中でも先生の今までの研究の文献をだされて読んでそれに対してレジュメをつくってくるっていうのがあったりするんですけど、みんな結構それを要約しただけであったりとか、「そう思う」とか「すごいと思う」とかいう感じだったと思うんですけど、「それは違うと思う」とか「ここはこういう研究をしたかったならデータの出し方はこうじゃなかったと思う」とか「この欄は必要なかったと思う」っていうのを反論を出していけるようになって、それができるようになったのは高校3年間で得た力やなあって思いました。人の話を言われたら「うんそうやな」っていうふうに受け入れるんじゃないで、「自分だったらこうやなあ」とか「こうしたらもうちょっとよくなる」っていうふうにもっと改善点をそこから見つけていくっていうのは、やっぱりビジネスプランであるとか学術研究で身につけた、普通の勉強だけしてたら身につかないようなことなんじゃないかなあっていうふうに思います。(AG9a)
- ・やっぱり内容もそうだし、その調べて論文にするときのその文章の残し方だったりとか、それをパワーポイントにしてスライドに作って発表するような資料を作ったりだとか、でどんな風に発表したらみんなに伝わるかっていう風に考えたりだとか、その学術研究っていうひとつの学びだけで内容

についても学べるし、調べ方も学べるし、一気にいろんな技術がこう身についたっていう。面白い
というか、そういう面はなんかすごい良かったなって感じですかね。(AG3)

3) 【精神面の向上】

内容：卒業生は、高校時代の学びから、【知識・技能の習得】だけでなく、【精神面の向上】も有ったと
認識している。様々な活動を通して<自信がついた>り、<主体性の獲得>に至ったと感じている。

また卒業後に<自校の良さ>を実感し、誇りに思うようになっている。

特徴：卒業生は、高校時代に精神面でも自分が肯定的に変化したことを感じている。上記2) 【知識・技
能の習得】と合わせて、様々な面で自らの成長を実感している。また、教員や出身校への感謝の思い
についても語っている。代表的な具体例は以下の通りである。

- ・私は、チャレンジ精神っていうのが一番●●で身についたことかなって思ってます。(…中略…)失
敗しなかったら別に悔しいとか何も思わないけど失敗したら、挑戦したら成功するかもしれないし
失敗するかもしれないけど、後には何か繋がるじゃないですか。なので、何かそこから私も先輩み
たいになりたいなと思って、キャプリーダーとかそういうのに積極的にチャレンジしてきたかな
って思います。(AG2)
- ・もうあとは発表の部分では、人にもものを発表する時にやっぱり自信にはなりますよね。大学に行っ
てもそれは通用する部分もあったので、自信にもなりました。(AG5)
- ・先生達も本当に熱いというか、真摯になって本当に私たちのことを支えてくれるから、今になって、
卒業したときは自分の気持ち、意志を強く持って頑張ったから両立できてきたとか思ってたんだけ
ど、今になって振り返ったら本当に先生方のおかげがとて大きかったなと思いますね。そのなんか
それは本当に●●のいいところっていうか、先生方が本当に熱いっていうか、私たちに対してのサ
ポートが。でいろいろ私たちに関わって下さって、支えて下さるから、それはすごいそのおかげで
色々やり遂げられたことがあったなと思いますね。(AG3)
- ・SGH になってから、●●が特化した事をこうやって張り出すようになって、そこが何か言うたら●
●のいいところなんやみたいなのも、私たちにとってわかりやすくなったんじゃないかなと思います。
(AG7)

4) 【未来】

内容：卒業生は大学型の教育に円滑に適応できており、高校時代の学びの<大学への繋がり>を高く評
価している。また、高校時代の諸経験が、進路など<未来への影響>が有ったという認識もなされて
いる。一方、大学生になって振り返ってみると、<高校生には難しい>(が今なら分かる)ことも有
ったと考えている。

特徴：卒業生は、SGH の教育プログラムの下での教育が、学習技術や汎用的能力や主体的に学ぶ姿勢
など、大学での学習や生活に対するプラスの効果を感じている。それは、大学に進学して他校出身者
と触れることで自らの学習環境が恵まれていたことを認識するとともに、大学教育の初期段階におけ

る精神的なゆとりを感じている。また、より広くは、進路選択や将来展望などにも影響したとする言及も多い。代表的な具体例は以下の通りである。

- ・自分にとっては学術研究とかビジネスプランとかそういった活動によって、ものを批判的に見る見方というか、分析するとかっていうところがついたのと、もうあとは発表の部分では、人にもものを発表する時にやっぱり自信にはなりますよね。大学に行ってもそれは通用する部分もあったので、自信にもなりました。 (AG4)
- ・学んだことは、まずレポートの書き方ですね。大学になってすごいレポート書くこと増えたんですけど、全然みんな苦労してるんですけど、なんでわからんの、くらいやっぱり染みついてるっていうか。それがよくなったなっていうのと、あと、研究、もっと深いところまで知りたいって、いろんなことに対して思うようになったきっかけがやっぱり学術研究だと、私はそうだったので、それがよかったです。(…中略…)もう、すごいです。すごい活かされています。 (AG10)
- ・それで私が商学部志望だったんですけど、結構ソーシャルプロブレムっていうのもっと難しいことだと思ってたのに、結構身近にあることが多いんだなあってことに気づいて、社会学部志望に変えましたね。 (AG9a)

(3) 各カテゴリー等間の関係性

次に、概念図にある矢印の意味を説明することにより、各カテゴリー等の関係性を示したい。矢印は各カテゴリー等を結びつけた発話が複数存在することを示している¹⁰。本来であれば、各矢印の説明について該当する記述の具体例（ヴァリエーション）を用いながら説明するところであるが、紙面の関係から代表的なもののみを引用することとする。

矢印①：SGHの教育プログラムとして国内外で活動する「豊富な機会」について、卒業生はそれらの楽しさや重要性を認識している。それは他者との交流や実際に現地に赴くことによる「多様な学び方」に起因するものである。具体例としては、発展途上国へのスタディーツアーに参加した卒業生AG1は、「楽しかったっていうのが第1にあるんですけど、まあそれがどう楽しかったかっていうと、そのまあ関わり、植林をすることもそうですけど、関わり合いが楽しかった」と語っており、具体的には「そこでの交流の方が楽しかったなあとと思うし、僕は、僕結構一生懸命働いたんですけど、そしてら現地の人が評価してくれたんですよ、あいつはよく働くヤツだなあって。それは結構嬉しかったですね。その現地の人から評価してもらえるっていう」と述べ、現地で人とのかかわりの中での経験の機会を重視している。また、卒業生AG2の「なんか学校でも先生たちからチャレンジ精神は大事にしてねみたいなのはよく言われてたんですけども、一番その先輩の話がずっと心の中に残ってて、(…中略…)。なので、何かそこから私も先輩みたいになりたいなと思って、キャンプリーダーとかそういうのに積極的にチャレンジしてきたかなって思います」という発話や、AG5の「本当に生徒と先生と一緒にその発表会を作り上げることが出来たっていうのを僕は良かった、いい経験だったなって思ってます。その時の発表会の時にも、外部の方からそういう点も結構評価されたっていう風に

聞きました」という発話にみられるように、先生や異学年生徒との関わりが重要な機会と捉えられている。

矢印②③：卒業生は、SGH の教育プログラムにおける学びの [豊富な機会] によって (矢印②)、また [多様な学び方] を経験したことにより (矢印③)、大学進学後にも有用な【知識・技能の習得】ができたと認識している。具体例としては、AG3 の「大学での授業で本の調べ方とか参考文献の書き方とかいうのを学ぶ」のだが、高校時代に既に学んでいるので「その点では知ってるから、あーもうそれは分かりますみたいな感じなんですけど (…中略…) やっぱその技術が役に立ってるかなという感覚ですかね」という発話や、AG1 の「先生が書いてくれることをノートに写して、それを勉強するんじゃなくて、自分で問いを見つけて、いろんな本を借りてきて、研究するっていう。こういうのがまあ本来の学びなのかなあっているのがよくわかったし、でまあそれをどうまとめるかっていうのも教えてもらえたんで、それは学びました」という発話にみられるように、一般的な高校教育とは異なる特別な学習の機会や方法から多くのことを習得できたと認識している。

矢印④⑤：卒業生は、SGH の教育プログラムにおいて [多様な学び方] を経験したことにより (矢印④)、また、学びの [豊富な機会] によって (矢印⑤)、母校の良さを感じつつ、主体性や自信といった【精神面の向上】があったと認識している。具体例としては、外国での学習経験が自らの主体性につながったとする AG9b の「実際に海外に行って刺激を受けたことで、英語に対する意欲もそうなんですけど、英語を取りくめるようになりました」という発話や、様々な学習機会を経験することで積極性が出てきたとする AG5 の「いろんな活躍する機会があったからこそ、大学に出てからもあまり新しいことをしたりとかっていうことに対してうって止まるところがなくて本当にどんどんどんどん突き進んでいくっていう人間になってしまったなどは思います」という発話がある。このように、卒業生は、内面に対して学習環境が影響を与えていると考えている。

矢印⑥～⑧：卒業生は、SGH の教育プログラムを経験したことが【未来】につながるものと認識しており、【知識・技能の修得】や【精神面の向上】を通して現在の大学での学びに有効に左右しているのとらえている (矢印⑥⑦)。また、SGH での [豊富な機会] が進路選択等にも影響したと考えている (矢印⑧)。これら矢印の代表的な具体例は、上記 4)【未来】で引用したものと重なっている。とりわけ前者については、卒業生が高校時代の学習経験や、そこから習得した能力およびそれに起因する成長により、大学での学習を円滑にスタートできていると認識している。

(4)ストーリーライン

以上の分析結果をストーリーラインとして要約すると、以下のようになる。SGH に指定された A 校には豊富な学びの機会があり、多様な学びが存在していた。卒業生は、高校時代にそのような学びを通して、知識・技能、学び方、アウトプットの仕方など、多くのことを習得した。また、卒業生は、高校時代の経験を通して、学習面に限らず、主体性や自信など、精神面での向上も実感している。高校時代にこれらを身につけたことで、大学型の学びに円滑に移行できている。さらに、SGH の活動は、卒業

生の進路等にも影響を与えている。

3. 考察

A校卒業生の語りにみられる特徴を改めて要約してみると以下のようなになる。

- (A) 外国での活動機会や人との交流の機会を高く評価している。
- (B) 自分が肯定的に変化したことを感じている。
- (C) 大学での学習や生活に対するプラスの効果を感じている。
- (D) 特に、学習技術や汎用的能力が身についたという発話が多い。
- (E) 進路選択や将来展望などにも影響したとする発話も多い。:
- (F) 教員や出身校への感謝の思いが語られている。

これら卒業生の語りにみられる特徴を、先行研究において示されている A 校生徒の語りについての分析と比較してみたい¹¹。生徒の語りの特徴は以下の5点に要約される。

- (a) SGHに指定され、海外での学習や探究型学習など、様々な機会が存在している。
- (b) そのような機会に触れることで、興味関心を持ったり、深く考えたりするようになる。
- (c) 生徒たちは成長や変容を感じており、知識・技能、思考力・判断力・表現力、学習意欲・人間性も身についたと認識している。
- (d) 他者との関わりから、そのような成長が生じている面もある。
- (e) 機会を活かして学ぶことにより、進路や学習方法など、将来や日常生活に変化が生じている。

これらのうち、(a)は卒業生の語りの特徴(A)と、(b)～(d)は(B)と、(e)は(E)と類似する内容である。すなわち、卒業生の語りの特徴のうち、(A)(B)(E)については同校生徒のそれにも共通してみられる内容である。

他方、(C)(D)は卒業生に特有のもので、生徒の発話にはみられないものである。これは、大学生になって高校時代の教育の効果を認識したもので、SGHの教育プログラムの学びが実際に活かされる場面を経験し、SGH指定校の生徒であった頃にはなかった視座からの評価を行っているといえる。(F)については、生徒の発話にも教員とのかかわりの良さ、SGHの教育プログラムの良さについての言及はみられるが、謝意が明確に表現されるという点が卒業生の語りの特徴の1つである。

このように、卒業生と生徒(在校生)との間には、共通する部分と異なる部分とがある。共通する部分は、第1にSGHの教育プログラム下での学びの機会や活動を高く評価しており、充実した教育条件・学習環境にあると考えている点、第2にそのような環境下での活動を経験することにより、様々な面で自らの成長を実感している点、第3にそれらが進路選択等の将来に影響があったことを実感している点である。

異なる部分については、SGHの教育プログラムを通して、知識や経験に加えて、高校生からみると未来に位置する「大学生」という視点からSGHの教育プログラムを振り返ってその意義を評価してい

ることと関係している。大学生となった卒業生は、文章の書き方やプレゼンテーション能力といった学習技術や汎用的能力、さらには主体的に学ぶ姿勢も高校時代に獲得したと認識しており、それらが現在の大学での学びに有効に機能しているとして、能力の向上をより明確に自覚している。また、大学に進学して他校出身者と触れることで母校の価値を相対化して捉える機会を持ち、他校の状況を知る機会に乏しかった高校時代には自覚の弱かった SGH 指定校での学習環境の恩恵を認識しており、生徒よりも明確かつ強く謝意について言及している。

結

上に示したように、SGH の教育プログラムの効果については、卒業生の語りと生徒それとの間に語りの一致がみられる。このことは、SGH 指定校の特別な学習環境が興味関心・意識の変容のきっかけとなっていること、従来型の高校教育とは異なる非日常的な教育機会が大いに刺激になることを¹²、卒業生のレベルでも確認するものといえる。卒業生の認識というレベルではあるが、SGH の教育プログラムが内面的な変化を促すとともに、将来の学習に有効に作用する能力の獲得にも寄与する形で影響を与えている。これが生徒の認識と共通性があるということは、SGH の教育プログラムがそれだけ成果を生んでいることを示すものといえよう。もちろん、実際にどの程度の能力が身につけているのかは別の問題かもしれないが、卒業生の実感は、一般的な高校教育を受けてきた他校出身者との比較に基づくものも多く、全く根拠がないものではない。

教育等の改善のための理論生成・実践支援をめざすという観点からは、このような成長の実感がそれだけにとどまるものではなく、教員にも影響を与えうるものである点にまずは留意したい。被教育者の成長が教員の動機付けとなるという副次的効果が先行研究において指摘されているが¹³、それは在校生の成長、すなわち教員の目に見えやすい範囲にある生徒についてのものである。卒業生とのつながりは、在校生のそれと比べると全くではないにしても少なく、その分その成長を実感する機会も少ないことになる。つまり、卒業生の成長は高校の教員にとっては相対的に見えにくいものである。だからこそ、教員がそれを知ることができれば、教育の中期的な成果も確認できることになり、さらなるモチベーションの向上につながると考えられる。他方、生徒は卒業後に他校との比較で母校の長所を強く実感していることから、在学中から自校の教育の特徴を相対化して認識することができれば、その機会をよりいっそう主体的に活用することにつながる可能性があると思われる。具体的にどうすれば良いかは今後の研究課題となるが、これら要素を組み込んだ学校経営理論、これらが可能になるような仕組みを組み込んだ教育実践を検討していくことは、高校教育の改善にプラスに作用すると思われる。

政策評価との関係では、生徒と同様に卒業生も SGH での学習経験が進路選択や将来展望に影響を与えているという語りがみられ、短期的なものだけでなく中長期的な未来への影響もあると考えている点が着目される。また、当事者である卒業生は大学における実際の学習場面において、SGH の教育プログラムの効果を実感している。すなわち、高校時代に受けた教育のおかげで、相対的に高いレベルで、いわば一般の高校出身者を一歩リードした形で、大学での学びを開始できていると認識している¹⁴。さらにその後の長期的な成果については、これに大学での学びの成果がプラスされることになるが、本研究の分析からは少なくともその円滑なスタートに貢献していることが分かる。高校教育から大学教育への切り換えが上手いかわからない大学生も多く、初年次教育の授業を設定する大学も多い中、調査対象の卒

業生には、大学生生活の初期段階における精神的なゆとりさえ感じられる。このような効果を考慮すると、円滑な高大接続、ひいては大学教育の質的向上にもプラスに作用する可能性があると考えられる。

これらは、相対的に長いスパンを視野に入れた指標を用いて、あるいは学習者のミクロな学習の場面に着目した指標を用いて測定しないと、適正に評価されない成果が存在する可能性を示している。本稿における分析からは、少なくとも大学生段階において（さらには可能な限り長いスパンで）評価すること、進路や進学先等に関する量的な指標に加えて、より高度な学習の教育場面での効果という視点を組み込んで評価することが、政策評価の多様化・複眼化につながると示唆される。

最後に、本稿の限界・課題と展望を述べておきたい。本稿では SGH の教育プログラムを経験した卒業生の語りを素材として、同じ高校の在校生に対する調査の分析結果との比較も交えながら考察を行うことで、量的分析では捉えにくい成果の一端を提示した。ただしそれは、SGH 事業の成果全体を示すものではなく、また、とりわけ投入された資金との関係で、その純然たる成果を捉えうるものでもない。それらを行うには学校や生徒の特性・属性、事業開始前に学校に蓄積されていた教育的経験なども視野に入れて、それらとの関係を踏まえながら分析する必要がある。本稿ではデータ上・倫理上の制約もあり、そこまで踏み込むことができなかった。教育の成果を分析する上で様々な要素の個々の影響力を切り分けて特定することは、これまでの研究でも十分に解決されていない技術的にたいへん困難な問題であるといえる。しかし、政策評価の精度を高める観点からは重要な作業であるので、この点を検討していくことを今後の課題として、本稿を終えたい。

註

- 1) 服部憲児「高校教員のスーパーグローバルハイスクールへの対応と教育力・意識の変容に関する質的研究」『地域連携教育研究』第6号（2021年）。同論文では主要な先行研究として、川崎将男・木野泰伸・朱藝・椿広計・永井裕久・ベントンキャロラインファーン『高校生のグローバル関心とSGHについての意識調査報告書』（2016年）、野田正人「研究開発校事業の学校改善への効果の定量的調査—スーパーグローバルハイスクール事業からの検討—」『教育行財政研究』第44号（2017年）があげられている。
- 2) 服部憲児「スーパーグローバルハイスクール指定校生徒の興味関心および意識の変容に関する質的研究」『地域連携教育研究』第7号（2022年）。
- 3) 服部憲児・祁白麗「グローバル人材を育てるカリキュラム改革—SGH、WWLの取り組みに着目して—」南部広孝編『検証日本の教育改革—激動の2010年代を振り返る—』（学事出版、2021年）108～109頁。
- 4) 木下康仁『ライブ講義 M-GTA』（弘文堂、2007年）、木下康仁『質的研究の記述の厚み』（弘文堂、2009年）。
- 5) 服部憲児、前掲書（2021年）、20～21頁。
- 6) 教員および生徒に対する聞き取り調査については、それぞれ服部憲児、前掲書（2021年）、服部憲児、前掲書（2022年）において分析されているので、合わせて御参照いただきたい。
- 7) 木下康仁、前掲書（2007年）。
- 8) ここでの分析手順の説明等は、主として橋場論・小貫有紀子「学習支援活動に携わる学生スタッフの変容プロセスに関する探索的研究」『名古屋高等教育研究』14（2014年）の書式に則った。
- 9) M-GTA においては、必ずしも発話数によって概念の成立・不成立が決まるものではないが、各概念の発話数、発話者数を参考として以下に示しておく。

概念別発話数・発話者数(A校卒業生)

概念番号	#1	#2	#5	#6	#9	#10	#11	#12	#14	#16	#17	#18	#19	#25	#28	#29
発話数	5	14	8	4	7	3	6	9	3	4	5	4	7	7	5	6
発話者数	3	8	5	2	6	2	3	6	3	2	5	3	6	4	3	4

10) 図中に用いられている矢印の方向は、調査対象者の発話にみられるカテゴリー等間の関係性であり、発話者の認識における因果関係を示すものである。矢印の太さは概ね関係する発話数の多さを示しているが、それと実際の因果関係の強さとの関係は慎重に検討する必要がある。また、太めの（関係する発話数の多い）矢印であっても、それが全ての調査対象者の発話に必ずみられるものではない。

11) 服部憲児、前掲書（2022年）、20～21頁。

12) 服部憲児、前掲書（2022年）、23～24頁。

13) 服部憲児、前掲書（2021年）、29頁。

14) 例えば、下記のような具体例に現れている。

- ・こう、例えば、大学入ってすぐに基礎演習があったんですけど、そこでレポートであったりとか、最終の論文を書くような授業があったんですけど、僕たちは元からその知識がここで学んでいたので、作ることに對してとか書くことに関して、僕は苦っていうのを、僕の場合はあまりなくて、っていう部分もありますし、発表に関しても、やっぱり大学にいても一定の評価は基礎演習でももらえたので、その点はもう直結してるなど。(AG5)
- ・普通の授業も SGH の学術とかビジネスプランを含めて、文章校正のやり方とか参考文献の書き方とかも全然知らない人もいて、そういう基本だと思ってるようなそういう知識が足りてるとか足りてないのだから違うなと思って。(AG6)

【謝辞】 本研究に協力いただいた全ての関係者の皆様に御礼申し上げます。

I would like to thank Editage (www.editage.com) for English language editing.

Response of High School Graduates to the Super-Global High School Project and Changes in Interests and Consciousness

Kenji HATTORI

Japan has recently adopted a performance-based approach to its education policy, and therefore, evaluates the achievement level of educational programs using quantitative numerical targets. However, educational outcomes are not limited to quantification. Thus, this study aims to clarify educational outcomes that are difficult to evaluate numerically. Therefore, it used qualitative analysis methods for the Super Global High School (SGH) project, considering the process from multiple perspectives. Analyzing an interview survey of 12 high school graduates from one of the SGH-project-designated schools, the author examined how the graduates perceive the SGH educational program, that is, what they believe, learn, and consequently the impact they perceive.

The interview analysis led to the following five findings: (1) Graduates believe that they have progressed owing to the learning environment of their high school and the SGH educational activities. (2) They believe that their learning experiences in high school had a positive effect on their studies and life at university. (3) Many interviewees mentioned that during high school, they acquired the learning skills and general-purpose abilities necessary for studying at university. (4) They realize that their learning experiences in high school had an impact on their career choices and future prospects. (5) They express their gratitude to teachers and the school they graduated from.

Of these, (1) and (4) are common to the survey of high school students, however, (2), (3) and (5) are specific to graduates.